

# 維新史 回廊だより

第7号  
平成20年  
(2008年)  
3月発行  
(年4回発行)

発行所 山口県環境生活部文化振興課

山口県山口市滝町一番一号 電話〇八三一 九三三二二二六二七

## ◇はじめに◇

いつも「維新史回廊だより」をご愛読いただきありがとうございます。今回と次回の二回にわたり、毛利博物館に所蔵されている史・資料の紹介を交えながら、天皇家と毛利家の関係を中心に幕末維新史を考えてみたいと思います。天皇と密接な関係にあった毛利家。そしてそれが維新史にどのような影響を与えたのでしょうか。解説は、毛利博物館の小山良昌館長です。

## ◇天皇と毛利家。そして明治維新(その一)◇

○天皇家と毛利家にはどのような関係があるのですか。

毛利博物館は、天皇と毛利家の関係を示す資料として、天皇の宸筆(天皇直筆の文書)や下賜品を数多く所蔵しています。また、下賜品以外で天皇との関係を象徴的に示すものとして、毛利家には紋所である定紋(一文字三つ星)・替紋(沢瀉)のほか、正親町天皇から下賜されたといわれている菊紋と桐紋があります。全国的に見ても、菊紋を紋所として所有する家は皇族以外では数少ないのです。

そもそも、毛利家の系図を辿ってみると、源頼朝のブレーンとして京都から鎌倉幕府に招、聘された公家の文章道を家学とした大江広元に至ります。その広元の先祖は奈良帝と呼ばれた平城天皇の御子阿保親王です。すなわち、毛利家の家系は皇統に連なっていたのです。このため、江戸時代には大名が直接朝廷と接触することは勿論、入京についても幕府によって厳しく制限されていましたが、毛利家だけは特例として入京が許されたので、三条河原町に京都藩邸を造り、歳末歳首の品物の献上も、天皇に近侍する伝奏家の勧修寺を通じて容易に行っていました。

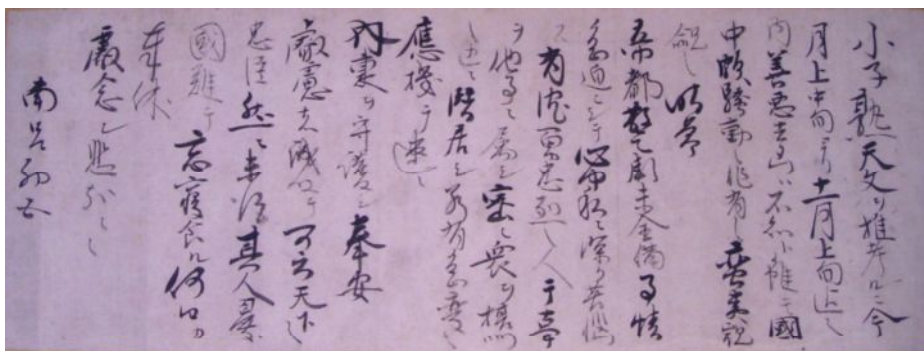
こうした背景から、毛利家は、伝統的に朝廷に対する崇敬の念が強く、

時には経済的支援も含めて朝廷を支援しており、また、朝廷からも信頼され、信任されてきたという経緯がありました。したがって、幕末の激動期に、藩主毛利敬親が一貫して尊王の立場で行動していることは当然のことであったのです。

○幕末期、長州藩に対して、天皇から何らかの要請はあったのでしょうか。

幕末期、当時の孝明天皇は外国に対する根強い反感を持っていたといわれています。安政五年(一八五八)六月、大老井伊直弼が天皇の勅許を得ぬまま日米修好通商条約を結ぶと、幕府は長州藩に対し、朝廷への表玄関とも云うべき摂津国兵庫一帯の海岸警衛を命じています。

その様な世相の最中、同年八月、朝廷から藩主毛利敬親に宛てて一通の密書が届きます。密書は天皇側近の議奏中山忠能・三條実愛が、孝明天皇の内意を奉じたもので、敬親に対して「國中騒動の兆しあり、心中密かに深く苦悩す、もし急変があれば、機に依りて速やかに内裏の警衛に任ずべき」『天下の忠臣』を毛利に期待する旨の内容でした。いわゆる「戊午南呂初五密勅」と称される勅書です。〔写真1〕外国に対する反感に加え、幕府が天皇の意志を無視する形で日米修好通商条約を締結したことにより、危機感を抱かれた孝明天皇が、以前から信任の厚い毛利家に『天下の忠臣』を求めて



〔写真1〕戊午南呂初五密勅(毛利博物館蔵)

密書を下賜されたものでした。〔写真2〕

○密書に対し、長州藩はどのように対応したのでしょうか。

長州藩では、既に「天朝に忠節、幕府に信義、祖先に孝道」という朝廷と幕府を共に重視する三藩是（藩の方針）を決定していました。この密勅に承えて新たに時局の收拾に乗り出しました。長州藩は朝幕間を周旋して両者の協調を図ることを藩の方針とし、それを進めた長井雅楽は、文久元年（一八六一）藩主に建白書『航海遠略策』を提出します。建白書は、朝廷が国の大方針を決定し、幕府は朝廷の命令を受けて全国の大名に号令を下す。また、進んで海外へ進出して皇威を世界に輝かすことが真の攘夷である、とする内容で、理路整然とした開国論であり、公武合体策でもありました。



〔写真2〕戊午拝勅会議図（毛利博物館蔵）



〔写真3〕孝明天皇拝領月絵扇子（毛利博物館蔵）

容易に下賜されない代物と伝えられ、公武周旋に対する天皇の篤い心情を示す品でもあったのです。〔写真3〕

藩はこの策を藩是と決定し、藩主敬親は長井に朝幕間の周旋を命じます。長井は先ず上京して三條実愛に建白書の趣旨を説明したところ、孝明天皇は「胸懐の雲霧がはじめて晴れた。早く海外へ押しかけて皇国の武威を發揮したいものだ」と全面的に賛意を表され、策の成果を大いに期待されました。敬親も同年十月には上洛し、天皇へ国俊作の短刀を献上したところ、天皇からは特に所用しておられた「月扇」など扇三本を賜りました。この「月扇」は天皇に近侍する公家でも

○長州藩が公武合体から尊王攘夷へと変わったのは何故ですか。

万延元年（一八六〇）三月、強権政治を行っていた大老井伊直弼が桜田門外で暗殺されると、徳川幕府は政策の転換を行い、老中の安藤信正は公武合体策を推進し、同年十二月、孝明天皇の妹君である皇女和宮の將軍家茂への降嫁を決定しました。この決定は尊王攘夷派の運動に火を付け、東禅寺事件や生麦事件など攘夷運動はますます高まり、文久二年（一八六二）安藤は坂下門外において襲撃されています。

長州藩内における攘夷運動の急先鋒は、吉田松陰の思想を受け継いだ久坂玄瑞らでした。久坂は公武合体策である航海遠略策を進める長井の排斥に立ち上がり、暗殺まで考えていました。やがて、孝明天皇のお考えも、「今後は攘夷の方向で朝幕間を周旋せよ」へと変わったのです。

その結果、文久二年七月、藩主敬親は京都藩邸に重臣を集め、苦渋の選択をしています。すなわち、これまでの藩是であった航海遠略策を取り止め、幕府が推進した外国との条約を破棄し、天皇のご意向に沿った「破約攘夷」を藩是と決定し、攘夷実行の方針を藩内に諭告しました。そして、同年閏八月、重臣益田弾正、高杉小忠太、周布政之助らを近衛閑白邸に派遣し、朝廷においても攘夷を確定するように進言したのです。その結果、朝廷は長州藩主の意向に承えた形で攘夷の方針を発表しました。

○天皇の長州藩に対する期待は、どのようなものでしたか。

文久三年（一八六三）一月三日、朝廷に参内した世子毛利定広（後の元徳）は、孝明天皇から天盃と御衣・御太刀（津田越前守助広作）を賜りました。〔写真4〕 ついで、参内を促された藩主敬親は、同十七日鷹司家より譲与された冠袍を着て参朝し、小御所に於て天顔



〔写真4〕御太刀（津田越前守助広作）（毛利博物館蔵）



〔写真5〕御太刀（波平安周作）（毛利博物館蔵）

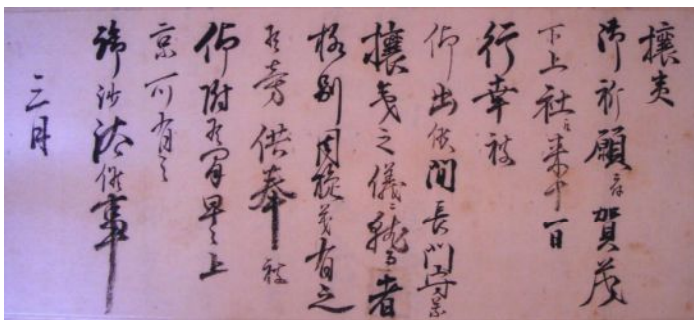
(天皇)を拝し、天皇から天盃を賜り、次いで廊下に於いて御太刀(波平安周作)〔写真5〕を拝受し、別室の虎の間において参議に推任する宣旨を受け取りました。このように、毛利氏父子に対する天盃や太刀の下賜、あるいは幕府の意向を無視する形で参議に任じて公家の一員並に推薦された裏には、天皇が忠臣毛利氏に対して特に期待する所が大きかった故であったと思われまます。

特に毛利父子に対して天皇自ら「御太刀」を下賜された行為は、古来、戦に出陣する征夷大將軍などの軍の最高指揮官に対し、指揮権の象徴として天皇が自ら刀を付与する「節刀」の制度がありますが、孝明天皇のこの「御太刀」の下賜は「節刀」に相当する行為であったとも考えられました。それまでの毛利家は、「三藩是」や「公武合体」を藩是として推進し、朝廷・徳川幕府の両者ともに重視する政策を取っていましたが、旧年七月の「破約攘夷」を藩是として以降、毛利家は朝廷寄りの立場に立ち、敬親父子に対する天皇の「授太刀」行為により、外観はともかく内心では幕府と袂を別ち、攘夷派としての立場を強めていった、と考えられるのです。

○長州藩は、どのようにして尊王攘夷を周旋したのですか。

同年二月、世子定広は関白鷹司邸に伺い、前右大臣鷹司輔熙に対し攘夷祈願のために京都賀茂神社への天皇の行幸を建言(意見を申し立てること)し、ついで学習院に家臣を派遣して、石清水八幡宮への行幸も建言しました。朝廷がこれら長州藩からの建言を受けて、賀茂神社・石清水八幡宮行幸を決定すると、行幸に供奉するために將軍家茂に上洛が命ぜられ、毛利家にも供奉沙汰書が届きました。〔写真6〕

同年三月十一日、賀茂神社行幸の当日、世子毛利定広は衛士卒を率いて京都藩邸を出発し、行幸を先導する形で扈從(付き従うこと)



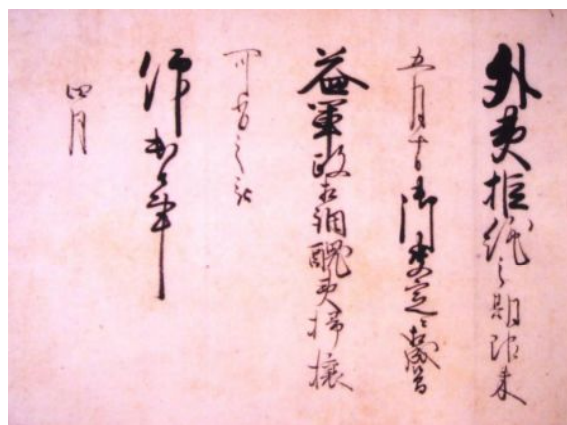
〔写真6〕攘夷祈願に付供奉沙汰書(毛利博物館蔵)

しました。この賀茂神社行幸は、天皇の鳳輦(行幸のときの乗物)に従う形で將軍徳川家茂が随従しており、行列を拝観する朝廷鬮(ひいき)の京都の人々は、改めて天皇と將軍の主従関係について思いを致し、皆感泣して、口々に毛利家の発起による行幸であるとして称え、毛利家の声望が高まったのです。その反面、関東から上京して行幸に参列した將軍にとって、この随従は屈辱そのものでした。鎌倉時代以来、將軍は武家の棟梁として長年にわたって武家政権を存続させてきましたが、行幸に随従して参列する屈辱に耐えきれず、四月に再度行われた石清水八幡宮への行幸の際には、將軍家茂は病気を理由に参列を取りやめ、後見役の一橋慶喜が随従しています。

この長州藩が発案した行幸における將軍の随従は、武家政権の前途を暗示する象徴的な出来事でもあったのです。

尊王攘夷運動が日々強まるなか、朝廷の強い督促に依えて、徳川幕府はやむなく攘夷の奉勅を列藩に布告し、次いで、攘夷の期限を文久三年五月十日と定めます。朝廷から攘夷期日を知らせる勅書が届くと〔写真7〕、長州藩内では攘夷期限決定の降勅および幕令を藩内に布告し、警戒令を発すると共に、馬関海峡の要衝に構築していた砲台を整え、攘夷決行に備えたのでした。

(次号につづく)



〔写真7〕攘夷期限伝奏書(毛利博物館蔵)

#### ◇毛利博物館のご案内◇

毛利博物館は、元々、旧長州藩主毛利氏の防府本邸として建設されました。旧藩士であった維新の元勳井上馨によって、現在の地への建設が決まりましたといわれており、大正五年(一九一六)に完成しました。

その後、昭和四十一年(一九六六)明治百年を記念して、毛利家から寄付を受けて財団法人防府毛利報公会が設立され、翌昭和四十二年(一九六

七)、本邸の一部を改造し、毛利博物館として累代の文化的・歴史的資料を一般公開することとなりました。

毛利博物館には、毛利氏伝来の平安時代以降の史・資料、総数約二万点が所蔵されており、その中には、四季山水図(山水長巻、雪舟筆、国宝)など国宝四件、重要文化財九件のほか、明治維新関連の歴史資料としても重要なものが数多くあります。そのほか、主に藩政に関する文書数万点が山口県文書館に寄託されており、「毛利家文庫」として公開されています。毛利博物館では、平常展のほか、一年を通じて様々な企画展が開催されています。特に毎年十一月には、「四季山水図」をはじめ、館蔵の国宝・重要文化財を中心に展示する特別展「国宝」が開催されますので、是非一度足をお運びください。

所在地 山口県防府市多々良一丁目一五一一  
電話 〇八三五二二二〇〇〇一

開館時間 九時～十七時三十分(十～三月は十七時閉館、入館は三十分前まで)

休館日 十二月二十二日～十二月三十一日

入館料 大人七〇〇円 小・中学生三五〇円(特別展を除く)

二十名以上の団体一割引

ホームページ <http://www.c-able.ne.jp/~mourim/>

#### ◆企画展等情報◆

▼岩国徴古館(岩国市横山二七七一 電話 〇八二七一四一〇四五二)

企画展 時代の変化と岩国(平成二十年三月十六日～五月十一日)

関ヶ原の戦いや幕末期など、時代の大きな節目において岩国がどのように関わってきたのかを芸州小瀬川合戦略図(写)や精義隊旗などの所蔵資料により紹介します。

入館料は無料で、月曜日(祝日の場合は翌日)は休館日です。

▼山口市歴史民俗資料館

(山口市春日町五一一 電話 〇八三一九二四一七〇〇一)

常設展示 明治維新(平成二十年四月一日～六月二十八日、十月一

日～平成二十一年一月十四日、二月十七日～三月三十一日)

文久三年(一八六三)に尊王攘夷の思想のもと、極秘に萩から山口へ藩庁を移してから明治維新樹立の明治二年(一八六九)に到着約七年間において、山口は、明治維新の中心地として重要な拠点でした。今回の展示では、この時期の長州藩の軌跡や明治維新に活躍した長州藩士の書などを紹介します。

入館料は、小・中学生五〇円、高校生以上一〇〇円、七〇歳以上の方は無料です(二〇名以上団体割引あり)。休館日は、月曜日、祝日の翌日(ただし、土曜、日曜の場合は開館)となっています。

▼山口県文書館(山口市後河原一五〇一 電話 〇八三一九二四二二一六)

第3回中国四国地区アーカイブズウィーク

吉田松陰自賛肖像展(吉田松陰自賛肖像・絶筆・松下村塾記修復記念)

(平成二十年六月一日～六月八日)

山口県文書館では、古文書や行政文書などを歴史的記録資料として保存し、利用に供することを目的に、資料の収集・整理、専門的な調査・研究等を行うほか、普及活動として古文書講座や中国四国地区アーカイブズウィークなどを開催しています。

今年で3回目を迎えるアーカイブズウィークでは、昨年度修復を終えた「絹本着色吉田松陰像(自賛)」、「吉田松陰絶筆」、「松下村塾記」を中心に館所蔵の吉田松陰関係資料を公開展示するほか、歴史探究講座や職員による展示解説など様々なイベントを開催します。

観覧は無料で、月曜日は休館日です。詳細は、山口県文書館(〇八三一九二四二二一六)へお問い合わせいただくか、ホームページ(<http://ymonjo.ysn21.jp/index.asp>)をご覧ください。

「あとかぎ」第七号は、幕末期を中心に、毛利家と天皇家の関係にスポットを当ててみました。明治維新には、様々な要素が複雑に絡んでいたと考えられますが、中でも、毛利氏が皇族の流れを汲む家系で、天皇の考えを直接聞いた、天皇に進言したりできる関係にあったということは、非常に大きな要素となつたのではないのでしょうか。次号は六月発行の予定です。